

ムカシの競馬を読む

平成17年・中山競馬場
皐月賞

優勝馬：ディープインパクト

© JRA



第117回 10年・20年・30年前の4月



今から10年前、平成17年の4月といえば、桜花賞をラインクラフトが、皐月賞をディープインパクトが制した月。ディープインパクトの現役時代が「10年前の出来事」になろうとしているわけで、時の経つのは速いものである。

その平成17年4月には、公営競技史上初の1000万円という配当が福島競馬で飛び出している。4月9日の福島9R、12、10、9番人気で決まり3連単が1014万9930円。その後3連単1000万円以上の配当は今年2月末までに計16回発生し、最高額は2983万円にも及んでいる（しかも）のれースは2着が同着で3連単の的中は2通りあった。またWIN5では1000万円以上の配当が決して珍しくないが、10年前の1000万円は、まだ免疫ができないだけに本当に衝撃的なものであった。

平成17年の4月といえば、今も続いているセリが始まった月でもある

。26日付のスポーツ報知から引用しよう。

「JRAが購入、育成した2歳馬による初めてのトレーニングセール『2005JRAブリーズアップセール』が25日、中山競馬場で行われた。これまでJRA育成馬は、抽選のすべ均一価格で取引されていたのが、市場経済に基づき、より分かりやすい形で馬主に購買してもらおうと、今年からセリ方式に改めされた」

JRAブリーズアップセールの始まりも10年前ということになる。つまり、このひとつ前の世代までで「抽選馬」という用語は死語になつたということだ。

この年は牝馬が最高価格となつていて。後にブリーズアップセールなどを勝つダイワパッションで、落札価格は3045万円だった。私も当時取材に行つていたが、セリ馬の空気は「一番馬はこれ」と誰もが認めるもの。いまのブリーズアップセール

だつたらもっと高値になるだろう。それまでの抽選馬制度だと開業後一定期間内の調教師にしか預託できない。完全に自由には馬を選べなかつた（抽選馬末期には馬を選ぶ順番が抽選されていたので、1番クジを選べば自由に選べたが、残り物から選ぶことになる可能もあつた）。セリになつたことでトータルの売上額も増え、JRAにとっても大きなメリットがあつたと言えよう。

平成17年4月には、競馬界に直接影響するわけではないものの、馬の世界全体ということでは画期的な出来事もあつた。16日付のサンスポから。

「イタリアの畜産研究所が14日、耐久レース世界一の牡馬（アラブ種）の遺伝子をコピーしたクローネン馬の生産に成功したと発表した。BBC放送などが伝えた。クローネン馬は、2年前に同研究所で母馬の細胞をもとに生まれた牝馬に統

ぱから。

それはミュール（ラバ）。馬を母、父を父として生まれるミュールは全員生殖能力が無い。アメリカの一部の州では「ミュールの競馬（競ラバ？）」が行われるのだが、その活動性もあつた。セリ馬と関係のあるクローネンが生まれている。

それはミュール（ラバ）。馬を母、父を父として生まれるミュールは全員生殖能力が無い。アメリカの一部の州では「ミュールの競馬（競ラバ？）」が行われるのだが、その活動性もあつた。セリ馬と関係のあるクローネンが生まれている。

ムカシの競馬を読む



すだかお 須田鷹雄

1970年東京生まれ。競馬ライター。サラブレ、大阪日刊スポーツなど各種媒体に寄稿中。

いて2頭目だが、優勝馬のクローンとなると初めて。競馬界や馬術競技界にも影響を与えるそうだ

ご存知通り競馬の世界ではクローンどころか人工授精も認められないで、この種の研究が競馬に影響を及ぼすことはない。しかし「完全な馬」以外ならこの記事以前にもっと競馬と関係のあるクローネンが生まれている。

もクローンとともにフェア競馬で勝利を収めている。

続いていまから20年前、平成7年の4月。この月にはワンダー・パヒュームが桜花賞を、ジエニヨインが皐月賞を制している。ワンダー・パヒュームを管理していたのは女性厩務員の藤井美津子さんで、女性厩務員による初のクラシック制覇となつた。

同じ月には日本人騎手による歴史的な騎乗が実現しているのだが、結果が芳しくなかつたこともあってあまりファンに記憶されていないのが残念である。9日付の日刊スポーツから引用しよう。

「田中剛騎手のグランードナショナル挑戦は、無念の落馬、競走中止に終わった。英國リバプール郊外のワイントリーカー競馬場で8日午後3時45分に行われた世界最大の障害戦に日本人騎手として初めて参戦したが、騎乗のザコミッティ（ゼン12歳・愛スコット厩舎）が第1障害でバランスを崩し落馬、当初の目標である完走はならなかつた」

日本調教馬は昭和41年にフジノオーラがグランドナショナルに挑戦（競走中止）しているが、当時は現地の騎手が騎乗。日本人騎手の参戦はこれがはじめてだった。前の馬の落馬に巻き込まれての落馬だったよう、残念な限り。日本人がビーチャーズブルックやキャナルター

ンを越えているところを見てみたかつたものが、しかし、あの大イベントに参加したというだけでも賞賛に値することだろう。

続いて30年前、昭和60年の4月。いまでは券種も発売方法も進化した馬券の世界だが、30年前はまだこんな段階だったということが分かる話をお届けしよう。4月26日付の日経新聞から。

「公営ギャンブルの不振が続いているなか、一都三県にある四公営競馬場（大井、川崎、浦和、船橋）はこのほど、これまでレース開催中の競馬場内でしか売つていなかつた馬券を残り三つの競馬場でも同時に発売することに合意した。馬券の発売窓口を多くすることで売上額の減少に歯止めをかけるとともに、ファンサービスの向上を図ろう」というねらい（以下略）

前年の昭和59年度には船橋と浦和が单年度赤字に転落しており、巻き返しをはかる狙いがあったのだろう。当時はもちろんオフトだのジョイホースだのといったものは無く（最初にできたオフト後楽園が昭和62年）、この時点では馬券を買おうと思つたら開催中の本場に行くしかなかつたということである。

競馬おやじたちはそれだけ手間を惜しまなかつたということだろうが、本場の売り上げだけで競馬が

維持できていたというのがすごい話。まさに時代を反映した新聞記事である。

もうひとつ昭和60年4月から29日付の北海タイムスから引用しよう。

「（前略）下山（筆者注：逮捕された容疑者）は、同日行われた東京競馬の外れ馬券四枚の数字をカツターナイフで切り抜き、別の数字を張り付けて当たり馬券を偽造。同日午後三時二十分ごろ、同市中央区南三条西四、私設馬券両替所『ホース商会』で換金しようとしたが、ひと目で店員に見破られた

私設馬券両替所というのは最近のファンは知らないだろう。場内混雑の激しい頃、発売所（この場合ウインズ札幌）の公式窓口以外に、手数料を取つて馬券の払い戻しを請け負う業者があつたのだ。後楽園などは比較的最近まであつた。気が付けば競馬では無くなり、他の公営競技場も向日町競輪などごく僅かの天然記念物級になつてゐる。